

「花」を詠む

首藤 静夫

当クラブの「ペン俳句」で月に一度の句会を楽しんでいる。これが毎月の月初めである。この五月は四日であった。翌日からは次のお題で句作りが始まる。翌六月のお題は「紫陽花」である。今日は五月十日、晴天。紫陽花は淡い色がわずかについた程度だ。それでも想像をたくましくして雨に濡れた色濃い紫陽花を思い浮かべて詠む。毎月これの繰り返しである。五月なら薔薇でも眼白のさえずりでも構わないのだが、どうしても翌月のお題に気分が引きずられる。

紫陽花はまだしも、梅や桜となると寒々しい枯木に「花を咲かせて」詠むのだから勘弁してよと言いたくなる。お題が出た時から心はひと月先に飛んでいる。

ところで花の句、とくに桜や菊などを詠んだ句は山ほどあるが名句は少ないようだ。

芭蕉にも「桜」の句は沢山あるのだが人口に膾炙した句はない。

さまざまの事思ひ出す桜かな

などは比較的知られた句であろうが、これとて超有名とはいえない。他の作者も似たり寄ったりで、それほど「桜」は難しい。平安の昔から和歌にさんざん詠み込まれ、それを越えられないのであろう。

菊花の句も同様に名句は少ない。

白菊の目に立てて見る塵もなし 芭蕉

菊の香や奈良には古き仏達 同

などが俳句の世界では有名だが、どうであろうか。いずれも菊の花の咲きつづりを正面から受け止めて詠んだ句ではない。塵がついていないとか古い仏達との抱き合わせとか相当な技巧が用いられている。プロが実地に足を運んで詠んでも難しい花の句を想像の中で詠むとは何と無謀なことかと思う。

さて紫陽花である。どう詠むか？ 頭のような毬の形を詠もうか、複雑な色合いを鑑賞しようか、雨と取り合わせてシックな情感を詠むか、新品種の艶やかさを詠もうか――。

最新のグローバルバード（AI）に、「斬新な紫陽花の句を作りたいのでアイデアが欲しい」とお伺いをたてたら月並みな応えが返ってきた。がっかりの反面安心もした。よしよし、まだ俺の方が上らしい。